

浄土

monthly
JÔDO

9

September 2004





昭和54年2月号



昭和54年3月号



昭和54年4月号



昭和54年5月号



昭和54年6月号



昭和54年7月号



昭和54年8月号



昭和54年9月号



昭和54年10月号



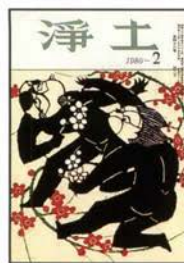
昭和54年11月号



昭和54年12月号



昭和55年1月号



昭和55年2月号



昭和55年3月号



昭和55年4月号



昭和55年5月号

The image features three glowing red cylindrical objects, possibly bamboo or metal, set against a solid black background. The cylinders are arranged in a triangular pattern: one on the left, one on the right, and one at the bottom right. Each cylinder is illuminated from within, creating a warm, orange-red glow that fades towards the edges. The lighting highlights the smooth texture of the cylinders and the circular openings at their tops.

竹

か
ぐ
や
ひ
め

灯

姫

ライン下りで有名な埼玉県長瀬。ここに竹灯姫を生んだ竹林がある。



竹灯姫は水分が命。
水中に保管される



あたかもかぐや姫の眼子竹を思わせる
美しい竹灯籠。



コンサート終演に合わせて火が灯けられる

画商が長瀬の竹林で見つけ出した
このやさしい灯は見る者の心を癒し
てくれる。その竹の灯で「竹灯姫」
が増上寺の参道を彩った。一本一本
子作りの竹灯姫、その灯は美しく、
そしてやさしい。

増上寺の参道を飾る竹灯姫



画商・星忠伸氏。竹灯姫の産みの親で、一番星画廊のオーナーでもある



200本の竹灯姫作りにはげむ、
星さんと杉本さん



陶芸家、杉本豊嗣さんは星さんの友人で長滞在住。竹作りの腕は星さんをしのぐとか

浄土

2004/9月号 目次

カラーグラビア 竹灯姫	撮影 小堀祐二	1
此岸への愛着・彼岸への思慕	佐藤成順	6
癒しのあかり 竹灯姫	星 忠伸	12
蓮・浄土庭園と蓮池	三浦功大	18
表紙のことば	石川忠夫	25
会いたい人 神田伯龍③	関 容子	26
響流十方	袖山榮輝	34
シネマ随想	袖山榮眞	38
連載 法然上人をめぐる人々	石丸晶子	40
Jフォーラム		47
浄土誌上句会	選者＝増田河郎子	48
マンガ『さっちゃんねッ』	かまちよしろう	51
編集後記		52



表紙題字＝浄土門主 中村康隆 猊下
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

此岸への 愛着 彼岸への 思慕

文学博士

佐藤成順

始皇帝の限りなき此岸への愛着

中国を統一した秦の始皇帝は、偉業を達成し絶大な権勢の座に就くと、自分の寿命が永遠であることを願った。天下を平定した二年後、山東省方面に巡遊したとき、この地の徐市（徐福ともいう）という人が書を奉り、「東海に三つの神山があり、そこには遷人（仙人）が住んでいます。つきましては、齋戒して身を清め、男女の童とともにそこを訪ねて、仙人を求めたい」と始皇帝に援助を願った。始皇帝はそれを許可し、徐市に、男女の童数千人をつれて東海に船出し仙人を求めさせた。仙人が見つかれば不老不死の術や薬が手に入ると思ったからであろう。山東半島の海浜地方では古くから神仙思想がさかんであった。半島から東方の海を見ているうちに、海のかなたに神仙の世界がありそうな気になってきたのであろう。

この四年後、始皇帝は、碣石山（地名は確定できないが山東半島より北の渤海湾を望む海浜のどこか）に巡遊したとき、秦に滅ぼされた燕の国の盧生という方士と出会った。盧生は、始皇帝に、海のかなたに羨門・高誓（羨門の高誓ともいう）という仙人がいると話したのであろう。始皇帝は盧生にこの仙人を探させた。また韓終侯の公石生に命じて碣石山の頂上に行き仙人の不死の薬を求めさせた。

始皇帝の神仙への関心、不老不死への探求は、その後、再び皇帝の前に現れた盧生の進言でさらに強くなった。

臣（盧生）たちは、芝草（長寿に効果のある植物）や奇薬や仙人を求めています、いつも見つけることが出来ません。これは誰かが妨害しているからと思われまふ。方

術に、「人主は時どき微行（他人に隠れた行動）して、悪鬼をしりぞけよ。悪鬼がしりぞけば真人^{しんじん}が至る」とあります。人主の居場所を臣下が知れば、（君臣の俗情が邪魔して）神気を害します。神人は水に入っても濡れず、火に入っても焼けず、運氣をしのいで、天地とともに長久であります。今、上様におかれましては、天下を統一されたものの、無欲恬淡の域には到達しておられません。どうか上様がどの宮殿においてもなるかを、人に知らせてはなりません。そうすれば不死の薬を手に入れることができますよう。

この、でたらめとも思える盧生の話を、すっかり信じた始皇帝は、真人を慕い、それ以来、皇帝の自称である「朕^{わが}」を止めて、自ら「真人」と称した。そして悪鬼をさけるべく宮殿の改修を実行した。まず都の咸陽城の周囲二百里以内の宮殿や樓閣二七〇を外部から見えない通路でつなぎ、帳帷や鐘鼓や美女などをそれぞれの建物の中に配置し、各々の所在を登録して移動できないようにした。こうして皇帝が宮殿内のどこにいるかわからなくした。また皇帝の外出に際し、その居場所を喋った者は死刑、という厳しい法令を下した。事実、始皇帝が梁山宮に行幸したときのこと、始皇帝が山上にいと、下に、丞相の乗った馬車が多数の供回りの衆を従えて通って行くのが見えた。皇帝の口から、「臣下のくせに行列が多すぎるな」と独り言が出た。その言葉をそばで聞いた宦官の一人が、丞相にそっと告げた。それで丞相は、以後、行列の供回りを少なくした。宦官の誰かが自分の居場所を丞相に喋ったわけである。始皇帝は激怒した。容疑者を次々取り調べたが、誰も罪を白状しない。そこで、あるとき山上で皇帝の近くにいた者を全員捕らえてことごとく処刑した。

このように、始皇帝の不老不死への欲求は異常なまでに変わった。盧生も始皇帝がこまめ自分の話を信じるとは予想していなかったに違いない。とまどい、結果を考えると恐ろしくなったのであろう。ついに逃亡を決意する。盧生は同僚の方士の侯生とともに始皇帝を非難し、「權勢を貪ることだけに終始しているから、仙薬を得ることができないのだ」と、逃亡を正当化して、始皇帝の前から姿を消した。

それを知った始皇帝は激怒している。「徐市は巨万の経費を費やしたけれども、いまだに仙薬を手にいれない、盧生は、手厚く処遇したにもかかわらず、こともあろうに自分の悪口を吹聴し逐電した」と。この怒りが当時の学者に対する強い不信感を招いた。帝は、役人に学者を取り調べさせ、奇怪なことを言っている人民を惑わしている、という噂のある学者四六〇人あまりを捕らえて穴埋めにしてしまった。世に言う「坑儒」である。坑儒は焚書（書物を焼く）とともに始皇帝の暴挙として著名である。この坑儒の断行の裏には、盧生らの裏切りに対する激怒があった。それは、始皇帝の狂氣的な現世への執着がもたらしたわけである。

始皇帝は、これで不老不死の道を諦めたように見えるが、まだ完全に捨ててはいなかった。始皇帝にとって死の旅路となった巡幸のおり、再度訪れた山東半島の地で、徐市を捜させた。徐市は始皇帝の前に連れてこられた。徐市はかつて始皇帝に仙薬のことを説き、仙人を求めて東海の島に船出した。あれから一〇年も過ぎてゐるのに、多大な費用をつかっているのに、まだ仙人も仙薬もみつかっていない。徐市は処罰されるのを恐れ、「蓬萊山の神仙の薬を手に入れることは可能です。しかし、途中に大鯨がいるので蓬萊山まで行き着けません。どうか弓の名手を同道させ、大鯨がでたら射殺してください」と口から

でためを言った。

そこで、始皇帝は、船員に大魚を捕らえる道具を携行させ、自らも連発式の石弓を持参し船出した。やがて、巨魚があらわれたので見事に射殺した。これで邪魔者は除かれよい結果が訪れよう、始皇帝はそう信じたに違いない。しかし、このときすでに始皇帝は病魔に侵されていた。

病は急速に重くなった。沙丘平原（河北省平原郷付近）に來たとき、ついに崩御した。隨行の重臣たちはその死をすぐに公表できなかった。独裁皇帝の旅先での死は、政情の不安を齎らすし、また重臣たちの権力争いの思惑があったからである。始皇帝の亡骸はひそかに都まで運ばれた。おりしも七月、暑い盛りで遺体は腐敗し始め、ひどい悪臭を^{なきがら}発した。そこでやむをえず皇帝の詔と称して、塩漬けの腐った魚を車に載せ、魚の臭気で屍骸の臭気をまぎらわした。こうして都に到着し皇帝の喪が公表された。

天下を平定し、絶大の権力と財を手に入れると、不老不死への願いが強くなり、その探求に異常ともいえる行動をとった。自分の意のままになる此岸に限りない魅力と執着を持った。けれども、その永生への願望は達せられず、五十歳の短い生涯だった。しかもその遺骸は腐敗し悪臭を放つ、という悲惨なありさまであった。（『史記』卷六・始皇帝本紀による）

彼岸への思慕

無常の理に基づく仏教では、人は、生まれてくれば老いがあり病があり死があり、この生・老・病・死の四つは避けることができない人間のもっとも大きな苦しみであると説く。そしてこの苦しみから救われる方法を説く。また、われわれが生存する国土とは異な

る地獄や天人の国土や仏の国土があり、人は死後、行いによりいずれかの世界に生まれる、と死後の世界、来世を説く。目にみえない世界、超経験的な世界を思索した古代インド人の宇宙観である。

われわれの住む国土、すなわち此岸は、迷いの世界、凡夫の世界である。彼岸は、さとの境地、仏の世界であり、極楽浄土でもある。

こうした無常観や他界観・来世観などを説く仏教は、始皇帝の時代にはまだ中国に伝わっていなかった。始皇帝の歿後二〇〇年余り経て仏教が中国に伝わると、この信仰は人々の心に大きな変革をもたらした。死後の世界、来世や彼岸の存在を信じ、自分や肉親がそこに再生することを願ひ心の安穩を得た。しかし、それと並行して、一方では、此岸尊重の不老不死の探求は、道教の中心思想となつて、広い階層の間で信仰されている。

人は誰でも彼岸に魅力を感じ、精一杯生きようと努力する。始皇帝ほどではないが、普通の人ならば此岸に愛着を持つ。彼岸と此岸は正反対であるが、此岸に愛着し、彼岸を思慕するのが、歴史上でも今日でも、大方の人間の生き方であろう。春秋年二回の彼岸会は、唐の善導大師の著『観経疏』かんきんしよ定善義じやうぜんぎに、春分と秋分には太陽が極楽浄土のある真西に沈むから、日没の処を觀じて極楽浄土を思念せよ、という一文に由来するともいわれる。しかし彼岸会の仏事はインドや中国では行われず、日本だけのようである。その理由はわからないが、それだけに日本の仏教徒にとって大切な行事である。彼岸会は、凡夫が此岸で清浄な彼岸の世界を思慕し、彼岸を思慕することによって、此岸の生活に新たな生き方を発見する機会である。

(品川・願行寺住職)

癒しの竹灯 あかりの かぐやひめ 姫



スペシャルインタビュー

星忠伸 画商

八月一日、浄土宗大本山増上寺境内で「フエスタ・デ・テンプル」というイベントが開催された。そして「佐渡裕のお寺で音楽を」と題したオーケストラコンサートが、初めて本堂で行われた。音楽に酔いしれた千人の聴衆をもう一度酔わせたものがある。本堂から三門への暗闇に並べられた二百本の竹灯籠、かぐやひめ「竹灯姫」だった。

その燈色の灯は、帰路の聴衆を幻想の世界に引き込み、まるで「かぐや姫」のお伽噺のようであった。

この竹灯籠はふとした縁から、日本橋で「一番星画廊」を主宰している星忠伸氏によって寄贈されたものである。

星氏にこの竹灯籠との出会いについて、埼玉県長瀬にある星氏の美術館「ミュージアム長瀬 一番星」でうかがった。

聞き手／本誌 平井泰代子 撮影／小堀祐二



——とても幻想的な竹灯籠でしたが、星さんが考案されたのですか

はい。それが偶然に出来たものでした。三年前に人に請われて、この長瀬に美術館を作りました。

この周辺に竹林が多かったこともあって、竹を使って何か創作しようと、いろいろ試みをしました。初めは、竹を三角に切つてろうそくを入れてみたりいろいろ試してみしました。

ある時、スタッフが竹を切ったときに、偶然竹の皮が剥けたんですね。この皮の剥けた竹にろうそくを灯したら、赤い光が何ともいえない美しさで、感動しました。それから試行錯誤しまして、今の竹灯姫かぐやひめに至りました。

——偶然に生まれた竹灯姫ですが星さんが魅入られたのはなぜだったのですか

私の仕事は画商なのですが、特に画家の中川一政氏とは亡くなるまで長いお付き合いさせて頂きました。

その中川氏が、和蠟燭わろうそくを大変好んだ人で、和蠟燭を灯し、地唄舞を鑑賞する会を開いたことがありまして、私も同席させて頂いたんです。

その時に見た和蠟燭の美しさに感動したことが、原点です。そして何よりこの竹灯姫のやさしい色合いが私自身を癒してくれるからです。

——確かに気持ちいが和らぐ色ですね。どんな竹を使われるのですか

二年から四年の真竹がいいですね。それ以上成長すると固くなりますし、灯の色が美しくないんです。

竹灯籠は二十四、五センチに切り、両脇に青い所を残して、後は皮が薄くなるまで削つ

ていきます。その後は、乾燥させないように水の中に浸けて、竹の殺菌作用によるぬめりがでないように毎日を水を取り替える作業があと、完成します。

竹は、切ったときに水滴がポタポタと落ちるくらい水分を多く含んでいる植物です。この水分が、ろうそくの火を赤く美しく光らせているようです。ですから竹灯姫は、この水分が無くなって乾燥してしまいますと、使えないという欠点があります。一、二回の命ですよね。

一、二回しか使えない竹に、これだけの時間と手間を掛けることは素晴らしいと思いませんか

——竹灯姫とお寺そして東京タワーがとっても調和していましたが、これから竹灯姫で計画されていることがありますか。

隅田川に一万本の竹灯姫で精霊流しが出来

たらいいなと考えています。

また、ニューヨークの九・一一の追悼に竹灯籠を灯すことができたなら是非やりたいという夢を持っています。

それは竹灯籠に、癒しの力とともに鎮魂する力を感じるからかもしれません。

——素敵な夢ですね。ぜひかなえて下さい。ところで、星さんが画商になられたきっかけはなんですか？

私の出身は福島県の広野町という人口七千人位の町で、「汽車」という唱歌の、「今は山なか今は浜」は、「く」間を通って「広野原」で終わりますが、この広野が私の生まれた広野町です。

体の弱い体力のない子供で、小学校二年のときに胸を患い養護学級に行きました。六年になると安定期になりまして、一般の病棟に移るんですが、同じ病院にいた小学生が亡く

錚々たる画家の作品が並ぶ、ミュージアム長瀬一番星。長瀬の自然に囲まれたここで、星氏は竹灯姫と出会った

竹灯姫を作る杉本氏



なったんですね。

病院の中に、霊安室と火葬場がありまして、子供心に、病院を出るには、火葬されてお骨にならないと出られないのだと思っていました。いつも白い煙をみながら、煙の絵をかいていました。今でも霊安室の絵を描けますよ。

その中で体力をつけるために、高校の三年間、夜裸足で走り続けました。その結果、自分に何か出来そうな自信がついたので、京都に行って絵を描こうと思いました。

その京都の市立美大に行くために、京都で三年間新聞配達をしました。それも体力作るために平地ではなく、起伏のある山のほうの新聞配達をしたのです。結局、美大には入れませんでした。この山の新聞配達で福田平八郎、稲垣足穂に出会い、これが画商になるきっかけになったのです。

そして、「石井三柳堂」という当時有名な画廊で、二年八ヶ月ほど修行することになります。この時に出会った梅原龍三郎氏、中川



一政氏らと親交を深めていくようになったんです。

——画商として、その画家の人たちとどう関わってこられたのですか

私と中川一政とは一政が亡くなるまでの二十四年の付き合いで、私が二十二、三歳の頃からの関係です。

私が画廊を開くにあたって、一政氏が自分の「一」と私の「星」から『一番星』を命名してくださいました。

その時の挨拶状に「この度、星君が画廊を開くことになりました。二十年来、星君を見送ってきた私は喜んでおります。皆様のお力添えを」と書いて下さいました。

中川一政氏の描いたバラの七割は、私が贈り続けたバラだったと思います。

朝四時に杉並の自宅を出て、六時に千葉の京成バラ園の鈴木さんというバラ博士のそこ

ろへバラを頂きに行きましてね。そのバラを中川一政氏、梅原龍三郎氏などに分けて行きます。

中川一政は、『絵』でも『書』でも生きて動いていなければいけないと言われて、『書』を書くときには、立って書かれていましたし、『花』を活けるときは投げ入れのように活けて、動きを大事にされていました。

また、一政の作る陶印は素晴らしく、今、私が親しくさせて頂いている画家の小泉淳作氏のために陶印を作っていました。小泉淳作氏は一政から陶印を作ってもらってからは、絵にサインでなく陶印を押していますね。

小泉淳作の絵の中に、中川一政も一緒に生きているんですね。凄いことですよ。二人の友情の素晴らしさを見ていて面白かったですね。

——星さんの画商のお話を聞いておりまして、竹灯籠に夢を託す意味が、少し理解できたように思いました。

増上寺だけでなく、他のお寺でも無償で竹灯籠を提供されていらっしゃるようですが、だれでもが出来ることではありませんね

四十歳までは人の役に立つことだけをしようと思ひ、人が喜ぶことだけをして生きてきました。人ができることしかしていません。一銭の得にもならないことですけれど、夢を持てるって楽しいじゃないですか。それに竹灯姫のあの灯は見た人みんなを癒してくれますからね。

星氏の『ミュージアム長瀬一番星』は、長野県の岡谷から百年以上経っている建物を移築したもので、なかに梅原龍三郎、中川一政、安井曾太郎、熊谷守一の絵、川端康成の辞世の書、山頭火の句集、一政が焼いた陶器等が展示ではなく、個人の家に飾ってあるという形で、公開されています。まさに、星氏の人柄が伝わってくる美術館です。

その美術館は残念ながらこの九月で閉館になるといいます。だが、いやしの灯、鎮魂の火と、出会えたことは星さんにとつてかけがいのないものだつたに違いありません。

余談になりますが、天正十八（一五九〇）年の八月一日（朔日）は、徳川家康が初めて江戸城に入った日で、大名や直参が白帷子を着て登城し、祝詞を述べたそうです。そうしたことから八月一日を祝儀の日として、この日から中元の挨拶が始まったそうです。

家康とゆかりのある増上寺で、八月一日の夜を、竹灯姫の灯が三門までの道を照らしていたことに不思議な縁を感じました。

蓮

浄土庭園と蓮池

三浦功大

蓮の花は仏教の隆盛とともに日本人の心には、極楽浄土への来迎花となった。平安時代になり浄土信仰が貴族社会に浸透すると、平安貴族は死後に、西方浄土にあるという大輪の蓮の花が咲いている、極楽世界に往生することを願った。生あるものは永遠ではない、必ず死が来る。それは誰にとっても恐怖である。しかし、『阿弥陀経』には、死は消滅することではなく、極楽世界でまた生まれることだと説かれている。

平安中期の僧で諸国を遍歴した、空也上人（九〇三〜九七二）は、「一度も南無阿弥陀仏といふ人の蓮はすの上にのぼらぬはなし」と詠んで、一声でも念仏を称えた者は、みな極楽の蓮の台うたに生まれかわれると、信心を説いた。『浄土三部経』といわれる、『無量寿経』『阿弥陀経』『観無量寿経』には、阿弥陀さまの教えに従い、一心不乱に、南無阿弥陀仏と称え続けられ、臨終に際し西方浄土から阿弥陀如来が、菩薩や眷属とともに音楽を奏で、散

華しながら、迎えに来るといふ教えに従い、枕元に浄土変相図・浄土来迎図を飾って、極楽への往生を願った。浄土変相図・浄土来迎図は、西方浄土の光景を図像化したものである。

極楽世界（西方浄土）のことは『阿弥陀経』に、次のように出ている。

又舍利弗、極楽国土、有七寶池、八功德水、充滿其中、地底純以、金沙布地、四辺階道、金銀瑠璃、玻璃合
成、上有樓閣、亦以金銀瑠璃、玻璃磚磑、赤珠瑪瑙、而嚴飾之、池中蓮華、大如車輪、青色青光、黃色黃光、
赤色赤光、白色白光、微妙香潔、舍利弗、極楽国土、成就如是、功德莊嚴。

とあり、極楽世界の蓮池は、七種の寶石で飾られ、池の中には八種類の特性を持つ水が充滿し、……蓮の池は車輪ほどもあり、それぞれの花は青黄赤白の光を放って咲いていて、まことに清らかで芳しい、とある。

極楽浄土を二次元的に描いたのが曼陀羅図・浄土変相図である。そして三次元的に具現化したのが浄土庭園である。平安貴族は、より『阿弥陀経』の教えに近づこうと、浄土庭園を造り極楽往生を祈念した。浄土庭園様式は、仏堂と一体となって仏の浄土を莊嚴するために、仏堂前面に準備された園池を持つ伽藍である。池の西には阿弥陀堂を建て、池には中島を造り橋を架け、中島を経由して阿弥陀のおわす浄土に渡れるようにした。そして池には蓮の花を植えた。浄土信仰においては、蓮池は浄土世界を構成する重要な存在である。

『阿弥陀経』への深い信仰から、最初に浄土庭園を持つ伽藍を建立したのは藤原道長（九六六―一〇二七）である。治安二（一〇二二）年七月十四日、御堂関白・藤原道長が建立した法成寺の落慶供養が行われた。法成寺の庭園は天台首楞嚴院沙門源信（九四二―一〇一七）撰の『往生要集』（九八五年）に説かれている浄土世界に、魅了された道長が、その極楽往生を願って作った浄土庭園（蓮池）である。当日の様子は『栄花物語』（巻第十

七) に詳しい。

のどかに院の内の有様を御覧すれば、庭の砂は水精すいしやうのやうにきらめきて、池の水清く澄みて、色いろの蓮はなの花並はななみ生おひたり。その上に皆仏ぶつ顕あきれ給へり。仏の御影みかげは池に写り映うつじ給へり。東西南北の御堂、経藏金楼まで影写りて、一仏世界と見えたり。池の廻りに植木あり。枝ごとに皆羅網か、れり。はなびら柔らかにして、風なけれども動く。緑真珠の葉は瑠璃るりの色にして、頗梨はりしや珠の撓たをやかなる枝は、池の底に見えたり。柔らかなる花ぶさ傾たなきて落ちぬべし。緑真珠の葉は、盛なるに夏の緑の松の如し。真金葉は、深き秋の紅葉の如し。虎珀葉こくはく（は）、仲秋黄葉の如し。白瑠璃の葉は、冬の庭の雪を帶たるが如し。かようにして様々、色々なり。風植木を吹けば、池の波、金玉の岸を洗ふ。七宝の橋は、金宝の池に横たはれり。雑宝の舟、植木の蔭に遊び、孔雀・鸚鵡、中の州に遊ぶ。この御堂を御覧すれば、七宝所成の宮殿なり。

とあり、池では「いろいろの蓮の花」が咲き、橋は七宝で裝飾され、池はあたかも七宝の寶石で飾り立てられているような情景を描写している。「いろいろの蓮はなの花並はななみ生おひたり」の蓮の花を解説では、仏像を乗せているので造花とのことである。いろいろの蓮とは阿弥陀經にある赤、白、黄、青色の蓮だったのだろうか。解説の通り蓮の花は造花であつたらう。しかし、旧曆の七月十四日は現在の七月末から八月中旬の頃であらう、蓮の花の最盛期である。道長が極楽浄土を願う究極の空間として造営した、蓮池に造花だけとは考えにくい。当日の蓮池には赤、白、爪紅、斑などの蓮の花が咲いていたはずである。

同じく『榮花物語』巻第十八「たまのうてな」には、次のように出ている。

この御堂の御前の池の方には、高欄こうらん高くして、その下に薔薇・牡丹・唐瞿麥・紅蓮花の花を植へさせ給へり。

御念仏の折に参りあひたれば、極楽に参りたらん心地す。

とある。「たまのうてな」は、法成寺が落慶して一カ月後の治安二年八月の境内の様子を書いている。御堂（阿弥陀堂）の前の池には「紅蓮花の花を植へさせ給へり」とあるので、池には蓮の花が咲いていたと思われる。千年頃成立したとされる清少納言の『枕草子』では蓮は極楽往生のシンボルとしての役割をはたしている。『枕草子』の六六段、二七八段には、次のように出ている。

「六六段」 草は、菖蒲、菰、葵いとをかし。（中略）蓮葉、よろづの草よりすぐれてめでたし。妙法蓮華の

たとひにも、花は仏にたてまつり、実は数珠につらぬき、念仏して往生極楽の縁とすればよい。また、花なき頃、みどりなる池の水に紅に咲きたるも、いとをかし。（後略）

「二七八段」 関白殿、二月廿一日に法興院の積善寺といふ御堂にて一切供養させ給ふに、（中略）こと（法会）はじまりて、一切経を蓮の花の赤き一花づつに入れて、僧俗、上達部、殿上人、地下、六位、何くれまで持てつづきたる、いみじゅう尊し。（後略）

とあり、「六六段」では、蓮の花を仏前に供え、その実は数珠につらぬいて、一心不乱に称えれば極楽往生できると礼賛している。「二七八段」では、一切経を赤い蓮の造花一輪ずつに入れて、供養する様子は壮観だったことだろう。

藤原道長の子、関白頼道（九九二—一〇七四）は、後一条、後朱雀、後冷泉の三代の天皇に仕えて権力を掌中に収め、極楽世界の再現といわれる京都・宇治平等院を建立した。宇治平等院は父の法成寺を凌ぐ豪華絢爛な伽藍で「極楽いぶかしくば宇治のみ寺をうやまへ」（極楽の存在が信じられないなら宇治の平等院を拝め）と形容された浄土建築であった。三代藤原秀衡は奥州平泉に、平等院鳳凰堂を模した無量光院を造営している。

浄土教の普及とともに、全国で多数の浄土庭園を持つ寺院が建立された。『都花月名所』（寛政五年）には京都の蓮の名所の寺院が十二寺院紹介されている。今日、浄土庭園の形を留めている主な庭園は、関西では平等院鳳凰堂、浄瑠璃寺、円成寺、関東では永福寺（鎌倉市）、称名寺（横浜市）、毛越寺（岩手県）、白水阿弥陀堂（福島県）などがある。

『絵巻』の中の蓮

八世紀から九世紀にかけて、中国から入ってきた絵画様式の画巻（横長に展開する巻物に描いた絵画作品、日本では図巻、絵巻と呼んでいる）がある。この画巻から学びとり、十・十二世紀にかけて、日本独自の巻物芸術を創出したものに「絵巻物」がある。絵巻物はその内容に、ある一定の筋があるもので、物語、社寺縁起、説話、伝記などを詞と絵を時間的経過に従って展開する画法である。モチーフは社寺縁起、高僧伝記、風刺戯画などが主で、当時の人々の生活、風俗、調度、建築などが描かれていて、資料的価値が高い。初期の作品に中国の作品を写した、国宝『絵因果経』（奈良時代）がある。わが国の物語や説話を題材にした絵巻物が製作されるのは平安時代中期になってからで、『源氏物語絵巻』や『寝覚物語絵巻』など多数伝わっている。

これらの絵巻物の中に数は少ないが、蓮が描かれている場面があるので見てみよう。

国宝・北野天神縁起 八巻 承久本 京都・北野天満宮蔵

菅原道真（八四五〜九〇三）は昌泰四（九〇一）年正月二九日、左大臣藤原時平の中傷により、無実の罪を得て、太宰権帥に左遷され、この地において横死を遂げた。道真の死後、一門や朝臣にさまざまな不慮の災難が相ついだため、道真の怨霊のたたりと、天神社を建立して道真の霊を祀った。『北野天神縁起』第五巻第三段は、道真の死後、まもないある夜、延暦寺の座主・法性房尊意の住房

の妻戸をたたく者がある。みれば、菅公の亡霊が立っている。菅公の亡霊は、口上を述べた。いまこそ王城の地に押し入って恨みを報ぜんと思う。われに法験を得させよと、住房に立っているのが座主法性房尊意、冠に束帶姿、裾を長く引くのが道真の亡霊である。

国宝・一遍上人絵伝 十二卷 正安元（一二九〇）年 奥書 京都・歓喜光寺蔵

一遍上人（一二三八～一二八九）の遍歴の生涯を描いた絵巻物。門弟聖戒の詞、法眼円伊絵。巻八、巻十に蓮池がある。

巻八 大阪・天王寺を詣でた一遍上人が、金堂で念仏をとなえる場面。高名な一遍上人を拝もうと集まってくる人を描いている。金堂の後ろには講堂があり、蓮池には舞臺の舞台が設けられている。

巻十 備後国一の宮の吉備津神社（現在は広島県）門前の広場に柵で囲んだ蓮池が描かれている。厩には馬がつながれ、厩の厄よけに猿がつながれている。蓮池の一角には大樹がありその下に祠が見える。

国宝・玄奘三蔵絵（法相宗秘事絵巻）十二卷 藤田美術館蔵

法相宗の祖師・玄奘三蔵（六〇〇～六六四）の伝記を描いたもの。生い立ちからインドでの求法巡礼、帰国後の訳経と生涯を描いている。中日合作の祖師伝絵。浄土庭園に紅蓮が咲いている。

国宝・当麻曼陀羅縁起 二卷 神奈川県・光明寺蔵

『中將姫物語』で流布している、当麻寺に伝わる「当麻曼陀羅」の成立過程を描いたもの。蓮の茎を集め、藕絲を紡いで染め、曼陀羅を織る場面等が描かれている。

国宝・鳥獣人物戯画巻 四卷 十三世紀 京都・高山寺蔵

白描の戯画絵巻。猿、兎、蛙などの遊びを擬人的に描いたもの。蓮の葉を頭に乘せて踊る蛙や、猿の僧正と兎・狐の僧が蛙を供養する場面には蓮の花が供えられている。

重文・弘法大師行狀絵巻 十二巻 京都・教王護国寺蔵

聖德太子絵伝 鎌倉時代 茨城・上宮寺蔵

聖德太子三六歳の時の勝鬘經講讀の場面を描いている。画面全体に散華が描かれている。

重文・長谷寺縁起絵巻 三巻 鎌倉・南北朝（一四世紀）出光美術館蔵

奈良・長谷寺の縁起絵巻で、徳道上人が長谷の郷の古老に、長谷寺の本尊十一面觀音像は何処の木で造ったのかと尋ねると、近江国は白蓮花谷の白蓮が生ずる靈木から造ったという。「詞書」には、

古老語ていはくつたえきく近江三尾前山の白蓮花か谷に大なる臥木あり長こと十余文の楠なり此木常に光をはなち異香をくんす又諸天来下して白蓮花を持て此木に散す其花此木に属して蓮花を生ず其色又白色なり如此其谷にして多年を経たり故にいまは白蓮花か谷といふ。

「画中」『白蓮花か谷にして奇端あり』長谷寺縁起絵巻は他に、奈良長谷寺、鎌倉長谷寺本、徳川黎明会本などがあり、同一本からの模と考えられる。

重文・浄土五祖絵巻 嘉元三年（一三〇三）奥書 神奈川・光明寺蔵

中国浄土教の五人（曇鸞・道綽・善導・懷感・少康）の高僧（浄土五祖）の行状を描いたもの。第二段で道綽が念仏を唱えると阿弥陀如来が出現し散華をまき、人々がそれを争い拾っている様子が描かれている。

重文・地獄極楽図 京都・金戒光明寺蔵

融通念仏縁起 下巻 江戸時代 奈良・徳融寺蔵

融通念仏宗・良忍の説いた浄土教の一宗。

浄瑠璃絵巻 三巻 室町時代 サントリー美術館蔵

三河の国の国士司兼高の館の庭には紅白の蓮が咲き、船上では女房たちが管弦を奏でている。

表紙のことは

9
月

風の盆

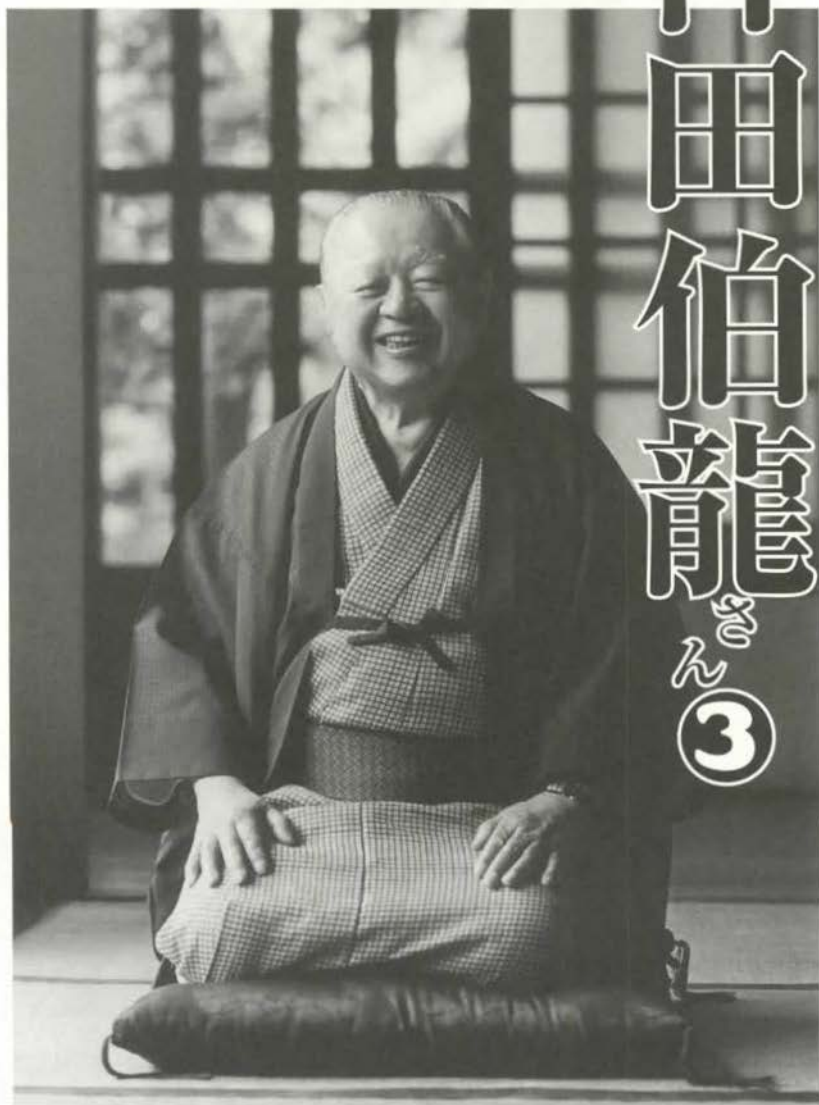
聞名寺

越中富山を代表する盆踊り「おわらの風の盆」は三百年、連綿と引き継がれてきた。踊りは気品高く優雅で、哀調ある胡弓の音曲にのる。祭日三日がいつからか盂蘭盆三日に変わり、さらに九月の一、二、三日、二百十日の厄日に豊穡を祈る「風の盆」となった。八尾十一町内から、町流し、輪踊りなど、伝統ある絵柄の浴衣を着た踊り手が出て音曲に合わせる。この三日間、八尾町の人工2万2千人の10倍以上の客が、全国各地から訪れる。宿は借り切れ、狭い街筋は足の踏み場もなくなる。

連載

会いたい人
関 容子

神田
伯龍
さん
③



戦後しばらくして真打に昇進する。

神田伯梅改め伯治。昭和二十二年四月のことだった。

「先代の伯龍師匠は吉本興業に所属していて、わたしものちに入りましたから。真打披露は渋谷の吉本有名会でした。当時吉本は東京にもいくつも寄席を持ってましたからね。渋谷の寄席の向いにストリップ劇場があって、日本初の全ストというのが評判で（笑）、ラジオの『トンチ教室』でおなじみだった春風亭柳橋師匠に誘われては、昼席と夜席の間に毎日通ってました。ロシアの混血とかいう踊り子がみんなのお目当てでね。そうそう、ここの幕引きをしたのが、亡くなった作家の田中小実昌さんでしたよ」

伯治になりたてのころ、伝説的名優の六代目尾上菊五郎に講談を聴いてもらったことがある、という話にはびっくりした。

「六代目さんとうちの師匠とは親しい間柄でしたからね。稲荷寿司がお好きだというんで、

わたしが届けにやらされたりしてましたから、じゃあちよいと聴いてやろうか、つてことで、ある日楽屋でお弟子の梅花さんに、坊や……、と言われてもう二十二、三でしたけど、小柄でしたからね、旦那が聴きたいとおっしゃるからおやり、つて。とんでもない。というのは、以前、『破壊された顔の持ち主』というので売ってた落語の歌笑さんが招かれて、お得意の歌笑純情詩集より、我たちちねの胎内を出でしより……と始めたら六代目さんに、それでどしたい、それからどしたい、を連発されて泣き出した、つて聞いてましたからね（笑）。大丈夫よう、旦那が聴いてやろうなんて滅多にないことよ、と言われて、十五分ばかりやりました。そしたら、うめえうめえ、つて、お小遣いをくださいましたよ」

それから間もなくの昭和二十四年五月、先代伯龍が六十歳という若さで亡くなり、続いてその七月には六代目菊五郎がこれも六十四歳で亡くなっている。

左から貞鳳、伯治（伯龍）、五代目馬琴、伯麟。
本物亭の楽屋にて



日本テレビで塩原太助を演じる伯龍。
この他、東芝日曜劇場などにも出演している

「戦争中に師匠は鶯谷の駅で軽い脳溢血で倒れたことがあるんですが、昭和二十四年の正月には自分の死期を悟ったんでしょか。俺は今年で死ぬからお前憶えてくれ、つて『天保六花撰』という大事な十八番を教えてくれました。あのころの芸人はみんな挨拶代わりに楽屋でヒロポンを打ってましたが、師匠はヒロポンが嫌いでコカインを常用してまして、そのせいで眼がドロツと濁ってましたね」

伯龍さんによれば、ヒロポンは「喘息に効くエフェドリンをこさえるために出たカス」なのだそうで、これは戦争末期に特攻隊員が「カァーッと気がのぼせて敵に突っこめる」ように開発された薬だという。

「わたしがなぜこれをおぼえたかと言えば、戦争中慰問に行くと、打たれたんです。つまり芸人たちを寝かさないんですね。最初のころは頭が冴え冴えとして、何でもすぐ憶えられるし、まるで天下取ったような気になるんですが、そのうちに体がポロポロになってく

るんです。艶っぽい都々逸の柳家三亀松師匠がヒロポン党で、うちの師匠はある日打たれて、三日三晩眠れなかった、と怒っていつさいやりませんでしたが、文楽師匠とかはやってましたね。円生さんは怖がりでやらなかったし、志ん生さんはお金がなくてやらなかった（笑）」

伯龍さん自身は、ある日自分の講談をラジオで耳にしてあまりに間が狂っているのに驚き、ピタリとヒロポンをやめたという。

伯龍さんが吉本興業に所属してよかったことは、芸風が派手になったこと。

「女興行主として名を馳せた吉本せいという方は、最初は船場の御寮人さんでしたけど、あんまり旦那が芸人に入れ上げるんで、そんなに芸ごとが好きなら……つて、店たたんで、法善寺の花月から始めて、その後関西にも関東にも吉本の小屋をたくさん持った方です。そのお方がわたしに、あんなな、大阪では江戸の芸やんなはれ、こつちで上方風の芸をし

たら本場にかないませんやろ、って。なるほど、と思いましたよ。しかし上方漫才の間に
出てたので、自然に調子を張るようになった
し、たとえ十五分の講談でもどこで盛り上げ
たらいいかとか、いろいろ勉強になりました」

しかし先代伯龍の死によって、弟子である
伯龍さんの事情もいろいろ変わってくる。

「お葬いの日に、吉本の東京支社の林弘高社
長に、これからは講談の時代やないで、活動
俳優になんはなれ、と言われたけど、これは
お断りして、同時に吉本も辞めました。でも
そのころテレビにときどき出るようになって、
東芝日曜劇場では吉井勇原作の『お源の
魂』で藤間紫さんと御一緒だったり、バラエ
ティ番組では『塩原太助』をやったりしたこ
とがありますよ。いつでもわたしがあんまり
早く台詞を憶えてくるものだから、森繁（久
弥）さんなんか都合が悪いらしく（笑）、台
本は二度くらい変るんだからそんなに早く憶
えて来ても無駄だよ、って。ドラマもまだナ

マ放送だった時代です。テレビにも当時の神
田伯治のまま出てました」

伯治改め六代目伯龍となるには紆余曲折が
あり、まだずつと先の昭和五十九年のことにな
る。

さて、伯龍さんの結婚の経緯はドラマチッ
クだ。相手は先輩講談師である七代目貞山の
妻だった人で、十八も年上の女性。

「七代目貞山で……下から照明を当てて不気
味な顔で怪談をやる、幽霊貞山と言われた人
だったんですよ。そのかみさんは千代と言っ
て、麴町で萬朝報（まんしやうほう）という新聞の販売店を經營
していた人の娘ですから、当時の府立第五、
今の富士高校を出てる才媛です。父親は萬朝
報の社長でそのころの売れっ子作家黒岩涙香（くろいわなみか）
なんかとも親交があった知識人で、その娘が
なんであんな貞山と夫婦になる気になったか
わからない。得をしたのは貞山で、何しろ千
代は筆が立つから、貞山の台本は全部この人
が書いた。古い講談を新しくしたり、わかり

昭和58年、芸術祭優秀賞記念のパーティにて。

左から、二人目劇作家の宇野信夫、湯西川温泉「本家伴久萬久旅館」大女将、伯龍、千代夫人



前妻千代夫人。80歳で亡くなった昭和63年、国立演芸場ロビーにて

にくいところにうまく解説を加えたり、時間内にうまくまとめたりして、高座でそのまましゃべれるようにするんです。貞山という大名跡をあの貞鏡^{ていきょう}が継げたのは、まったくこのかみさんあつてのことですよ」

講談の台本はそのまま当時の娯楽雑誌に売れたのだが、千代さんの手には渡らず、いつも生活費に追われていた。

「お袋から金をもらえ、つて貞山にいわれるけど、いちいち言い出せないんだそうです。

そのころ、正岡容^{いさむ}という寄席隨筆で高名だった博識な作家がいて……噺家になる前の桂米朝師匠や小沢昭一さんなんかも師事したほどの人ですが、この人が千代にベタ惚れで、ちよいちよい貞山宅を訪れる。近所の人が見張りに立つくらいでね(笑)、酔つて来たときは、なんであんな男と一緒にになったのか、つて泣くんだそうです。ちよつと淡島千景を思わせるいい女でしたからね。そのうちに貞山が、寄席のお仲間たちに芸人荒らしの女を押しつけられて早稲田のほうに囲うようになってからは、ますますかみさんへの虐待がひどくなった。もう、痩せ衰えてきましてね。見るに見兼ねて家裁へ訴え出てようやく離婚にこぎつけさせました」

そのときの調停員が、こまごまと優しく世話を焼く伯龍さんにある日こう言った。あなたが独り身なのなら、この方を引き取ってあげたらどうですか……。

「それでどうせ乗りかかった舟、というか渡

りに舟というか(笑)、で一緒にになりました。わたしがませてたせい、十八の年の差なんてまったく感じませんでしたね。しかしあのころでも週刊誌が喧喧囂囂^{けんけんさうさう}の騒ぎで、二十五、六歳の若造が、先輩の四十三歳のかみさんを奪った、とかね。でも結局得をしたのはわたしです。こつちに学問がないですから便利でした。訊いたことがすぐにわかる生き字引ですからね」

それからの二人は三十六年と六か月の間、千代さんが八十歳で亡くなるまでおしどり夫婦を全うした。

「裕福でなくとも暮らしには困らなかつたし、毎にかみさんは晩酌をし、肴は料理屋の俵^{はし}だった私が作つたし……ええ、楽しかったです。前夫のほうはと言うと、間もなく中気で病みついて、五十九で亡くなりました。息子がいたので、七つのときから引き取って、大学まで出してやって、でも講談をやりたいと言うので面倒を見て、今は親父の名を継い

で八代目貞山です」

千代さんの亡くなるときがまたとても劇的だった。

「わたしが伯龍になって四年ほどたつて、千代は心臓が弱つてきて近くの病院へ入院してたんですが、とにかく日に四度は見舞いましたね。女房としやべるのが日課になってますから、何ごともすぐにしやべりたくなるんです。あんた、あたしが死んだらきつと死んじやうわよ、つて、満更でもなさそうでした。暮れも迫つて退院して来まして、十二月二十日の晩、アワビが好きだったんでわたしが刺身に作つて、歯が丈夫でしたからコリコリかじつて、冷やの酒をキユーツとやりましてね、翌朝、寢床の中でニコニコニコ笑つてるから、どうしたの？　つて訊いたりしながらテレビを見てたら、いつの間にかそばへ来て、あなた、どうも有難う、と言つてそのまんま事切れたんです。あとで女房の友だちが、あら、ほんとにやつたの？　つて。つまり、こ

うやつて死ぬんだつて、よく稽古してたそうなんです。それまで有難うなんて言つたことがないので、そしたらわたしがどんな顔するか楽しみだ、つて言つてたそうです」

その後伯龍さんは、今度は二十三歳年下の敏子さんと暮している。どこへ行くのも敏子さん運転の車でいつも一緒。大変具合がいい、という。そう言えば初婚はぐつと年上で再婚はうんと年下がいい、という林敲氏の「人生二回結婚説」があつたが、まさにそれ。

「今のかみさんは立正大学で息子の貞山の一年後輩でしたから、年中われわれ親子の講談を聞きに来てました。受付にいた御先代（千代夫人）とも顔見知りになっていて、十八年間はわたしと貞山の観客でした。それで千代が亡くなるとすぐにこのかみさんの夢枕に立つて、伯龍をよろしく頼む、と言つたそうなんです。わたしの夢枕には立たなかつたので、何だかよくわかりませんが、まあ、この人がそう言うんだから、そうなんでしょう（笑）」（終）

子どもも妻も、父親も母親も、財産も穀物も、はたまた親族親類も、さらには多岐にわたるもろもろの欲望を打ち捨てて、あたかもサイの角のように一人となつて行動せよ。

(釈尊『スッタニパータ』第六〇偈)

*『スッタニパータ』…仏教經典最古の文献とされ、その成立はアショーカ王の即位(紀元前二六八年)以前にまで遡れるという。釈尊の滅後、程なく編纂が開始された詩句は、歴史上の人物としての釈尊の言葉に最も近いものとされている。

敬老とサイの角

物心がついてから小学校の高学年に至るまで、私は気管支炎喘息に悩まされていた。今はもう患うこともないが、その発作はしばしば「何でこんな時に」というタイミングでやってきた。

たとえば夏休み。年に一、二度しか逢えない親戚の従兄弟たちがやってくる。座敷の奥から玄関まで飛び出すように走って出迎え、従兄弟たちの前に体ごと滑り込む。荷物を解くのもどこかしぐらいに早々と飛び出し、夕餉を囲み花火をし、いっしょに風呂に入り寢床に就く。

心底楽しいのにいよいよ枕投げという段に近づいてくると、喉の奥が何となく締め付けられるように息苦しくなってくる。気が付くと、呼吸をする度に胸がゼーゼーと鳴り出しているのだ。

こうなると長い夜を覚悟しなければならない。息を吸っても、吐いても咳が出る。体を起こして枕を抱え、猫背になって、ただひたすらゆっくりと深呼吸を繰り返す。極力、気管支を刺激しないように呼吸して、発作が鎮まるのをじっと待つしかない。

それで、ようやく発作が過ぎ去るにしても、体力は激しく消耗する。翌日、

遊び回れるほどには快復しないのだ。それが分かっているだけに無理に切なかった。

「なんでボクだけ、こんな辛い目に遭わなければならないのだろう。いつも、ボクだけこうなんだ」

と理不尽な境遇に深まる孤独感。心配そうに覗き込む従兄弟たちも「大丈夫だから、もう寝なさい」と促す母の声に兄とともに別室へと引き払う。その後ろ姿に焦燥感が募り、悔しくて情けなくて何かに当たりたいのだけれども、苦しくてそれもできない。本当に身の処し方がなかった。

ところで、いつの発作だったか、母が私に言ったことがある。

「替ってあげたいけれども、替ってあげられない。苦しいだろうけれども、それがどれだけ苦しいか私には分からない」

人生には自分で受け止めるしかない苦しみがある、と幼いながらに思ったものだが、余りにもストレートで現実的過ぎる言葉に、他の言いようはないものかと長く私の中で引っかかっていた。

その引っかかりは、人並みに親となつて子育てに奮闘するなか、冒頭の釈尊

の言葉と向き合うことで少しばかり進展した。

サイの角のように一人となつて行動せよ――。

かけがえのない自分、家族も財産も煩惱をもたらずものと受け止め、それに打ち勝つていけば寛りの世界が開けてくるという意味だろう。個人主義を尊ぶ人にしてみれば、さぞかしクールにカッコよく響くはずだ。しかし、そうとだけ受け止めていいのだろうか。

我が子の苦痛を替つてあげられない母の無念さ、「なんで自分だけが」と悶える者に何もしてあげられない無力感、ただじつと見守っているしかない切なさ。自分が親になってみるとまざまざと身に滲みてくる。親子であっても他人の人生は歩めない。かけがえのない人生を譬えているのが「サイの角」かもしれないが、一つ一つの人生をただ見守るしかない切なさをも象徴していると思うのだ。

この私に向けられていた、ただ見守るしかなかった切なさに気付くこと。それが敬老の第一歩かも知れない。

（浄土宗総合研究所 袖山榮輝）

ツイステッド

〈配給〉アスミック・エース

シネマ随想



平成16年10月、渋谷東急ほか
全国松竹・東急系にロードショー

テレビ朝系の連ドラ『科捜研の女』——というより『科捜研の女』の沢口靖子にハマっているかたがた必見の逸品である。

ヒロインはサンフランシスコ市警殺人課新任、しかも紅一点の捜査官、ジェシカ・シエバード。彼女を演ずるアシュレイ・ジャドのクルクル目玉とツンとソリ返った鼻先は、沢口そっくりだ。（と筆者は思う）

警察署という男社会を中央突破して駆け抜ける突貫ギャルという役柄の設定も共通しているし、ジェシカの後見人的役割と思われるミルス市警本部長は小林稔侍の存在を連想させるが、全く共通していない部分が少なくとも二つあって、その二つがジェシカの行動をねじ曲げ『ツイステッド』のプロットが展開する。

京都府警科学捜査研究所のマリコは、家事苦手、居室は落花生狼藉という点では確かにダラシナイが、ジェシカのダラシナサはセックスに関わるものであって、この映画で死体となって発見される四人は、すべて彼女と「寝

たことのある男」ばかりなのだ。

もう一つは、マリコと共通していないが、筆者自身と見事に共通する欠陥で、相当量の飲酒のあと前後不覚になるという症状である。

性的奔放と昏酔症と殺人事件が燃り合わされた一筋の縄が捕縛しようとする容疑者は、ジェシカ・シエバード本人をおいて外にない。

死体の一つに付着していた被害者以外の人物の血液が、自分の血液であると同定されれば容疑は確定する。追い詰められたジェシカが自らの指先にカミソリを当てて採取した血液標本を鑑識にかけるのだが、「血液はいろんなことを教えてくれるのよ」という女性鑑識官（ガムリン・マイハイムというための女優だが、実に頼もしい）の予言が的中して、血液中に大量のロヒプノール（レイブ・ドラッグとの恐ろしい異名をもつ催眠剤）が検出され、殺人事件時刻の前後不覚は昏酔ではなく昏睡である事が立証されるに及んで、プロットは急転直下、最後のドンデン返しに向う

のだが、これから先の紹介を控えるのが仁義というものだろう。

その代り、といつては少々妥当性を欠くかもしれないが、「蛇足」を二つ付け加えよう。

その一

筆者を定期的に悩ます一つの悪夢がある。自分は殺人者らしい。「らしい」というのは明確な記憶がないからだ。しかし自分には昏酔という持病(?)があり、この間の行動については記憶がないのが当り前。しかも、うすうす気付いているその事実を一生隠し通したいという「深層意識」の意向に応じて、その事実があったということ自体を「無かったことにしよう」と「表層意識」が不断の活動を続ける。その活動が功を奏して「何年何月何日の昏酔時に誰を殺したらいいのか」という事さえ、いつしか忘れきってしまったのだが、「知っているヤツ」が近くににいるぞ...という、逃れようのない窮地に立たされるのだ。功罪という言葉があるが、悪夢といえども

プラスの効果をもたらすことがある。この悪夢にしばしば責めさいなまれるうちに、筆者は「往生礼讃」(善導大師)の末尾「広懺悔」のリフレイン「数を知るべからず」の冒頭「殺害せること数を知るべからず」の告白を、わが身に引き当てて誦むことができるようになった。既に我が人生も晩年に入っていると思われる現在に至るも、「知っているヤツ」の出現は現実とはなっていないが、「無始よりこのかた」と記されている以上、前世であるいは前々世で犯した罪の記憶が、悪夢の基底を形成している可能性を認めるのが、善導大師に直参する道だと了解されたのである。

その二

この映画のタイトル・バックが素晴らしい。霧である。海鳥の声がまびすしい。霧の絶え間からゴールデンゲイト・ブリッジが見え隠れする。霧のサンフランシスコである。カメラが海面近くまで下がると超近代建築を背景に、なんとアシカが群居している。霧を

縫って飛ぶペリカンたち、この群影が球面に映っている。ズームアウトが始まると球面は主演女優アシュレイ・ジャドの眼球であり、「鬼才」と呼ばれる映画監督ならではの水際だったオープニング。

その三

第二の死体を海中から収容するシーンで、ジャイアンツのホームグラウンド、パシフィックベル球場のナイターが遠景を彩る。かつてこの都会をフランチャイズとしていたのは、シールズという3Aのチームだった。今も群像を続けるアシカに因んだネーミングである。昭和二十四年一〇月、オドゥール監督の率いるシールズの訪日によって戦後の日米野球が再開され、一月にはセ・パ二リーグ制に展開する。六戦全敗という戦績を現況と比較すると、日本選手のレベルの向上は目を瞠るばかりだが、オーナーたちの企業意欲レベルの衰退は目を覆うばかりといわざるを得ない。

法然上人を
めぐる人々

一の谷



中
いじかお

◆第九回◆

石丸晶子

絵・石川忠夫

(十)

とそのとき、つつつと一騎の騎馬武者が傍らに駆け寄ってくる気配を忠度は感じたと思うや、はつと振り向く間もなく、彼の肩は鎧ごしに相手の両腕にしっかりと組み押さえられていた。

東国の武者、猪候党に属する岡部の六野太忠澄である。

忠度は平家の中では大力で名高く、また早業にもたけていた。

敵に組み押さえられたと知った瞬間、彼自身もすぐに、馬上から二刀を六野太にあびせかけた。

二度、三度、互いに馬上でそうして切り合ううちに、互いに組み合ったまま二人とも馬から落ち、落ちたところでさらに、忠度は三度、六野太に切りつけた。

だが、六野太の鎧がよくて鎧の裏まで刀が貫通しない。

そうして上になり下になりして地面に転びあい、組み合っているところに、六野太の郎党が主人を救おうとして駆けつけてきた。

郎党は忠度の右の腕めがけて、大刀を思い切り打ちおろした。

はつとした瞬間、腕に熱いものが走ったと思うや、大刀を持つ忠度の右の腕はつけ根から切り落とされていた。

右の腕が切り落とされては、大刀を持つことも槍を持つこともできない。

「命はこれまで」

とその瞬間、忠度は覚悟した。あたりは血の海である。

「しばし、われらから離れよ。十念唱えてから斬られようぞ」

忠度はいった。六野太と斬り合っている最中も、頭の中には法然の姿が浮かび、その姿に必死に縋る思いで彼は大刀を合わせていたのだ。

「しばしわれらから離れよ。十念唱えん」

と彼は再度いい、左の手で六野太を突きとばした。

忠度は西にからだを向け、声高く念仏を唱えはじめた。

十念ののち彼はさらに唱えた。

光明徧照

十方世界

念仏衆生

攝取不捨

唱え終わるか終わらぬうちに、六野太は忠度のうしろに廻り、その首を落とした。

六野太は忠度が着していた鎧をみて、平家方でも身分のある武将であろうと察して馬を走らせて来たのであったが、忠度の首を打ちとつても誰なのかわからなかった。

そこで郎党に彼は、

「この見事な鎧をみるに、この御方は平家一門の一人と推察されるが、さて一門のいずれの御方かわからぬ。名乗らせてから討つべきであった」

といいながら亡骸をあらためてみると、籠かご（背に負う矢の容器）の中から小さく巻かれた一枚の紙が出てきた。

六野太は

「何が記された文ぞ」

といいながら巻紙を解いていった。しかしそこに記されていたのは作戦にかかわる覚え書きなどではなく、

「旅宿の花」

と題され、

「薩摩守忠度」

と署名された次の和歌一首のみであった。
行き暮れて 木の下かげを 宿とせば

花やこよひの あるじならまし

旅先で日も暮れてしまった。あの桜の木蔭を宿としようか。そうしたならば、さしずめあの梢に咲く花が、今宵のあるじとなるのかもしれない。

六野太は、まさしく平家一門の大將軍の一人を打ちとつたのであった。それを知ると、

彼は大声で呼ばわった。

「武蔵の国の住人、岡部の六野太、薩摩守忠度をば、このようにお討ち申したぞ」

(十一)

平家の大手の大將軍に任せられていたのは新中納言知盛と本三位中将重衡で、総勢四万余騎で生田の森に集結し、源氏の大手範頼軍五万余騎との決戦の時を迎えていた。

勝敗はなかなかつかない。

と平家の背後から源氏の武者たちが乱れ入りはじめて来た。

後ろ手に廻った源氏の手勢もいるのか、と思う間もなく、源氏の兄玉党から知盛のもとに使者がやって来た。知盛はかつて武蔵国の国司であったことがある。そこでそのよしみで、兄玉党の源氏の武將は、こう知盛に進進の使者を送ったのであった。

「一の谷も、鉄拐ヶ峰下の陣も、すでに平家方の敗戦となっております。背後の状況をこ

らんにならないのですか」

この口上をうけて、前方ばかりに氣をとられていた知盛はうしろを振り返った。

空一面に黒煙猛々とたちこめている。

このまま生田の森の戦場に止まっていたならば、平家は前方の範頼軍と、後方の一の谷や鉄拐ヶ峰下の戦いに勝って乱れ入ってくる搦め手の義経軍との、はさみ打ちになるであろう。

生田の森に集結して、前方の源氏の軍勢と戦っていた平家四万余騎は慌てた。

そこで慌てふためき、騒ぎながら平家の人々はいっせいに西をめざして逃げ、あるいは海岸に浮かぶ平家の船をめざして海に向かったのである。

修理大夫経盛の嫡子で、都落ちのときに仁和寺の守覚法親王のもとに琵琶の名器青山を返しにいったあの但馬守経正は、このとき河越の小太郎重房の手にかかって討死。

その弟経俊、そして清盛の子らである清房、



清定は、敵の中に入って散々に戦ったが、遂に討死。

門脇の中納言教盛の末子業盛は大力で知られていたけれども、常陸国の住人士屋の五郎とその兄四郎に組みしかれて、彼もついに討死した。

(十二)

小松家の末子備中守師盛は、三草山の敗戦を守盛がいる平家の総本陣に報せにいったあと、海上に浮かべた小船に乗り、屋島に逃げていった兄たちのあとは追わずに海上で待機していた。

二月七日は午前になっていた。

師盛は小船に侍五、六人を召し連れ、なぎさ近く船を漕ぎよせて戦さのなりゆくはてを見守っていた。

平家方の落ち武者たちが、次第々々に数をまして、西へ西へと落ちのびていく姿がみとめられる。

海岸近くのそここでも、敵味方入り乱れて射ち合うさまがみえた。

「平家が敗れた」

と師盛は知った。

「お味方、敗れたらしうございます。早う沖へ出て、大船に乗り移りとうございます」

と侍たちが口々にいった。

「卑怯ぞ」

師盛はきつぱりと答えた。十七歳の若年ながら、あっぱれな若武者である。

とそのとき、ひとりの平家方侍が、敵に追いかけられ、馬に乗ったまま海中にがばがばと大慌てで入ってきた。

知盛の配下の侍で、清右衛門という大男である。

彼は師盛が乗っている船をさし招き、

「お乗せくだされ、お乗りくだされ」

と叫んだ。

「乗せてやれ」

師盛は命じた。

だが彼に従う侍たちは口々に、

「あの者を乗せてやれば、われらの命も危う

ございます」

「あの侍は小松家に仕える者ではありませぬ。小松家の者でない侍を、乗せずともよう

ございます」

といい始めた。

「助けてください。お乗せください」

清右衛門は小船をさし招きつつ、叫びに叫んでいる。

「乗せてやれ。同じ平家の侍ではないか。命令ぞ」

師盛は再度、きっぱりといった。

その命令に、小船はやむなく岸に向って漕ぎ寄っていった。

と、背後から迫る敵から逃れようとして、大慌てに慌てた大男の清右衛門は、大鎧をまとい、大太刀を肩に打ちかけ、馬の鎧をここを限りと強くふんばって、師盛の小船にとび乗ろうとした。

だが、飛び乗った瞬間、小船は転覆してしまった。

師盛も、従う侍たちも、船頭も、船中にいる人々はみな、なぎさ近い海中に投げだされた。

ある者はそのまま海に沈み、ある者は転覆した小船につかまって慌てふためいている。

とそのとき、騎馬を海中に乗り入れてきた源氏の武者畠山の郎党木田次郎に、師盛は討ちとられてしまった。

(つづく)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。



浄土誌上句会

● 論

〔特選〕 論敵の笑顔に似合う夏帽子

月島 恭子

会えば論戦が始まる。正に好敵手である。その相手が目の前に居る。目深にかぶった日除けの帽子がよく似合う。笑みを浮かべながら、今にその口から強い言葉が出てくるのだろう。さあかかって来いだ。

〔佳作〕 目で論し口で論して新入生

堀 菅子

緑陰に入りていつしか論客に

浜口 佳春

すずき釣り議論はじまる浜の宿

石原 新

● 布

〔特選〕 背の日焼け宿の敷布のごわごわす

石原 新

海水浴にでも行ってきたのだろう。布団に身を横たえると、日に焼けた背中がひりひりして、上を向いては寝ておれない。いつもな

ら気にならないだろう宿の敷布が、変にごわごわしているように思える。

〈佳作〉

伸子張り済みし布の香母の日来る

中島富士子

賜高音布裂いて編む小座布団

片桐てい女

布裂いてはたきを作る初夏の夜

山口 信子

●自由題

〈特選〉

痛み止め効き来て眠気遠蛙

北川 弘子

頭痛、歯痛その他、どのようなのかは読者の判断に任されている。痛み止めの注射か薬か、ともかくも効いてくると、少しずつ眠くなってきた。遠くで鳴いている蛙の声も、何となく薄れてきたようにも思う。

〈佳作〉

仏ヶ浦浪穏やかに海猫湧けり

佐藤 雅子

白日傘としてまぶしくなりにけり

工藤 掉

籠ぬけて部屋を狭しと飛ぶ堂

増田 信子



参加作品.....編集部選

布

涼しさに布裁つ鉄切れよくて	増田 信子
大布を広げたるごと青田風	谷 しげ子
雑布を縫う手に数蚊止まりおり	山口 信子
布地寄せパッチワークのさくらんぼ	井村 善也
晒布巻き孫もくり出す夏祭り	浜口 佳春
布巾晒し厨仕事の終りとす	周東 澄江
布教師と隣り合わせの梅雨の旅	佐藤 雅子

論

論客といわれ選挙に汗とばす	石原 新
世論沸く勝つより愛嬌競い馬	佐藤 まり
夫婦して今年の植田論じけり	中島富士子
論尽せ論を尽せとほととぎす	片桐てい女

自由題

子の口のミルク溢れて若葉風	井村 善也
笹百合を育てる指の節くれて	増田 信子
グローブのワックス多目走り梅雨	佐藤 まり

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇〇四年九月二十日
発表・『浄土』二〇〇四年十一月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

技 輪 自由題

③季語ではありません

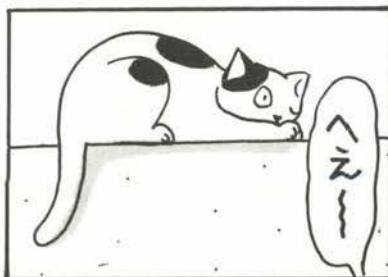
蟻の列家数に沿うて曲がりけり	浜口 佳春
流れ藻を母とすくみし稚魚の群れ	石原 新
降り出して来て賑わしき枝蛙	野村多加子
目の届く限り砂浜初夏の風	野村 昭輝

さっちゃんね



13 かい目

かまちのひろ



編集後記

世界平和祈つてゐる間にも歸雲 岱潤

先日テレビで、アメリカでは今テロ対策のために、トラックドライバーの中に情報提供員をおいていると伝えていた。このニュースを聞いたとき、二十年前カシオで聞いた、ボルボト政権が一般人の中に密告者を募り、親兄弟までも通報している話を思い出した。政権が異常事態になると、国民全体に緊張感が走り、その緊張感によつて政権を維持しようとする動きが出てくる。ここまで来るとその緊張感を更に高めるための事件が起きないことを願うだけだ。

戦争という異常事態を起こすとき、人間は大義名分と手続きを重んじてきた。大義と手続きは戦争の勝敗にとつて何よりも大事なことで、それを軽んじた日本

が最初から非難されたように、また大義が嘘偽りであつたアメリカが、勝利宣言をしてもなお苦しんでいるイラクのように、その重要性は今なお変わつていない。

以前、文明が進んでいると思つてゐる国が先住民のいる地域を侵略するとき決まつて使われた大義が宗教だ。自分たちの宗教を教化するという大義によつて、先住民の土地を奪い服従させることを是としてきた。そしてこの企てに宗教者が教化できる喜びとして、協力してきたのが洋の東西を問わず行われてきた歴史である。日本の宗教者もアイヌモシリ（現北海道）において行われた。

宗教者にとつて緊張した中、すべきこととしてはならないことを明確にしておく時期が来ているようだ。（長）

雑誌『浄土』
特別会員、維持会員の方々

巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光円寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮眞(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
塚田弘導(平塚・晴雲寺)
中島眞成(青山・梅窓院)
中村眞道(仙台・愚鈍院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
真野龍海(芝・天光院)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)

敬称略・五十音順

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

浄土

七十巻九月号 頒価六百円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十六年 八月二十日

発行 平成十六年 九月一日

発行人

真野龍海

編集人

佐藤良純

印刷所

株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三三五七八 六九四七

FAX 〇三三五七八 七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

編集顧問

大室亨 皓

編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

村田洋一

山本正明の
四季の和菓子

秋の茶趣

月見の菓子



菓子／月の桂 器／廣永窯

やまもと まさあき 「とゝや魚新」店長。昭和二十八年東京生まれ。京都「たん熊」他で修業の後、昭和五十六年東京赤坂の「とゝや魚新」開店とともに店長となる。「喰切おまかせ料理」を看板に一客一亭のもてなしをめざす。



この季節、冴えわたる月の光を愛でる「月見」の行事は、日本人の美意識である「冬は雪あり、春は花あり、秋は月あり」の「雪月花」が基本になっています。

八月十五日の仲秋の名月は一名「芋名月」と謂われ、また、九月十三日の十三夜は「豆名月」「栗名月」と謂われています。

九月十三日の豆名月に、枝豆を裏ごしして牛皮と合わせたお菓子「月の桂」をお供えるのも風流ではないでしょうか。

「9月は枝豆が一番美味しい季節」と山本氏が教えてくれました。

法然上人鑽仰会の

本



『念仏讀本』完全復刻版
1,600円



『差出人は法然さん』
600円

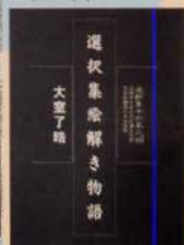
月刊『浄土』
バックナンバー



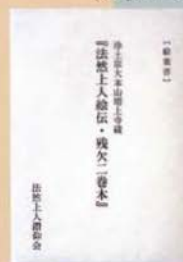
※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット)800円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話 / 03-3578-6947

FAX / 03-3578-7036